

父と母

千葉宜嗣

私が物心の付いた頃に、父はご機嫌の良い時に一杯飲みながら良く唄って居たのが鴨緑江節だったのを思い出しました。満州で馬賊に成りたかったそうです。

明治36年、生まれは、熊本県天草郡下浦町江の浦、本渡を少し奥へ入った静かな所です。祖父が石工だったそうですが、当時この下浦町には良質の岩石が採れ、此処の石工方は九州各地へ呼ばれ、此処の石材にて石橋や石垣作りに出掛けて幾多の優れた仕事に熟していた事は後で知りました。戦国時代、滋賀の琵琶湖辺に城の石垣や城壁作りが得意の穴太衆と呼ばれ当時の大名に重宝された集団と良く似て居ますが。

何時かは知りませんが、幼ない頃に祖父と共に一家（夫婦、姉二人、父）揚げて矢張り良質の岩石が出る対馬へ移ったらしく、父10才の頃に祖父が対馬にて亡くなり、途方に暮れたのか、稼ぐ為に当時、新興地として賑わいつつあった朝鮮へ、父は母と姉2人と共に渡ったそうです。学校などは論外だった様です。

唯、昔話に奉公先で未だランプの時代だったのか、そのランプの煤を掃除するのに凍えた手で磨いていると良く割れるので叱られた話をしておりました。

父自身はこの朝鮮、京城にて印判職人として丁稚奉公していたと思います。後に当時の職人仲間の方々が山口県や下関に居られて、昭和17年の正月に関門海峡トンネルを見たいと言った私を連れて行く途中にお伺いし、歓待された記憶が有ります。

父はこの京城にて日本女性と大正12年に結婚して居ります。併し翌年、男子が生まれますが、産後の肥立ちが悪かったのか、1歳少しの赤子を残して亡くなって居ます。この後、祖母や姉二人と未だ2才に成らない赤子を連れて、日本へ何故か大阪へ引き揚げて来ます。此の赤子が私の兄に当たります。

大正末か、昭和の初めに大阪の浪速区に居を構えた後、小さな印判店を大国町の西側道角に開きます。少し南へ行けば当時の府立今宮中学校が有り、大国町の市電交差点は四ツ橋辺りからと福島西から四天王寺への三叉路に成り、東側には銀行が二店並ぶ様な街でした。

私が幼稚園に入る頃には印判店としては立派な店舗に成って居りましたし、見習いか奉公人かは分かりませんが2～3人の弟子が居りました。父は仕事に自信を持ったのか、或いは兄の育児を祖母任せに出来ぬと思ったのか、再婚を考えたらしく、昭和3年頃に私を生んで呉れた母を後添いにと結ばれています。

母は大阪、天王寺区上汐町にて生まれ、父(私の祖父)も印判店を営んで居ましたが、代々、奈良屋伊助を名乗った由緒ある商人の慣れの果てとか、分家には名家が幾つか有ると母から聞きました。尋常高等小学校を卒業すると行儀見習いか口減らしかは分かりませんが、船場の大きな商家へ奉公に行き、お嬢さん付きだったとか、船場言葉の名残が有りました。

母は船場の商家から見習奉公終え、実家の上汐町に帰ると祖父は彫刻仕事は出来ない為に弟と共に外回りをし、印判の店内にて小物印刷(名刺、ハガキ等)の技術を身に付けていた様ですが、如何様にして結婚したのかは知りませんが、私が生まれるまでに、母は昭和4年、最初の子を流産、5年に男子を生まれますが、ひ弱かったのか7年に2才にて死亡、此の7年にも一人の子を流産し、昭和9年6月に私が生まれて又、死亡を恐れたか父が姓名学に頼って名付をしたと聞きました。

母は上汐町の実家で身に着けていた印刷技術を生かして父の店内に活字棚を配し、文選、梓組、手刷印刷機フードを一人で扱い、今で言えばハイテク女性だったと思いますが、盆や年末などは夜明けまで仕事に掛かるなど、暖房など無い寒い店での仕事にとても子育てなど出来る筈が無いと思はれますが、頑張っていた様です。私は夜中、遅くまで印刷仕事をする母の傍で家に帰らず、眠って居たことを覚えています。11年の正月に又、双子の女子を流産しています。この事は私が両親が無く成ってから過去帳を見て詳しく知ったのです。

父は学校へは行けなかったが良く修行し学んだのでしょう、印判彫刻家としても一流に成っていたのか幼稚園に入る頃には”はんや”としても大きい店舗とし、近くの今宮中学やその裏に在った成器商業校の書道関係の先生方との親交を重ね良く訪ねて来られていました。兄はこの間に大阪府立西野田職工学校を優等生10番内にて卒業しております。

唯、父は苦勞したからか実直ながら気性が激しく家族にも厳しい人でした。私が小学校へ入るまでに、自宅で家族4人の食事時に、母との言葉の遣り取りが気に入らなかったのか、丸い食卓膳を一気に持ち上げて茶碗ごとひっくり返すと言う事が幾度か有りました。

母は黙って跡片付けをした後、身支度を整えて私の手を引き家を出て行き、上汐町の実家へ里帰りを致しました。本当に別れる積りも有ったのか何日も帰ろうともせずいて、私が帰ろうと言っても聞いて呉れませんでした。

頑固な父も困ってしまったのか、既に嫁いでいた姉（叔母）を使い立てて、母を説得に來たのを薄っすら覚えて居ります。兄は西野田の機械科を卒業した後、父の姉婿（消防署勤めの叔父）が盛んに大学へ行かせる様に父や兄を説得して居りましたが、軍国としての雲行きが怪しく成って來ていた関係からか、兄は海軍関係の会社に就職します。兄を”はんや”の跡継ぎには向かないと父は考えて居たのかも知れません。確かに兄の書く文字は設計図の文字でした。

兄とは10才違いの俗に言う腹違いの兄弟でしたがよく可愛がって呉れました。両親が忙しいのを補うが如く、すき焼きが食えると砂川遊園地へ笠置山と河下り、遠くは伊勢神宮へ腹が減って何か食べる物は無いかと伊勢たくあんが甘いからと買い 列車の中でかぶりつつ夜中に帰宅して 父から二人並んで叱咤され 長い物差しにて両手を付いて謝っている上を叩かれたりしましたが 庇って呉れた優しい兄でした。

昭和16年12月8日、大東亜戦争が始まり、”香港破り マニラ抜き シンガポールも旗風に”と戦勝の提灯行列をしたのは直ぐに夢と消え、アツ島の玉砕を報じられた頃から戦況芳しく無く19年秋に児童集団疎開が始まり、4年～6年生の男女 約150人程が滋賀県甲賀郡貴生川町の大きな天理教会内へ疎開致します。この年の12月初めに大きな地震が有り 夜中まで揺り戻しが幾たびも有って怖かったのを覚えています。後に東南海地震と言はれました。

併し正月を過ぎると寒さからか 私は腰痛激しく連絡に來られた先生に連れられ大阪へ帰ります。堂島に在った阪大病院を手配して呉れ、母と幾たびも通院する羽目に成りますが、昭和20年の1月終わり頃から大阪空襲の警戒、空襲警報が頻繁に鳴り響く様に成って來ました。その度に今宮中学校の傍の空き地に父が掘っていた細長い防空壕に隠れるのですが殆ど夜中です。頻繁に空襲があり、危ないから疎開地へ帰れと父が言い、2月早々荷作りをしていたら、兄に招集令状が届きます。

2月15日か20日かに入隊する事に成って居た為に私も疎開地に帰れなくなり、出征の為、父は兄の出征祝いの魚類を矢張り仕事仲間だった泉南、尾崎の知人に頼み込み私お供

に買い出しに行きました。集まってこられた方々に何処から仕入れたのか祝い善にお酒も出されていました。 祝いの酒席が終わって休まず 翌朝、浪速区宮津の自宅から大阪駅まで多くの見送りの方々と両親も共に旗を振り軍歌を歌い、歩いて大阪駅まで見送りました。

この後の大阪は滋賀よりも寒い位に雪が降り益々厳しいB29の空襲が毎夜続き、30cm位積もった雪を掘って防空壕への道を作りました。大阪城近くに在った陸軍砲兵工廠への爆弾攻撃ですが 離れた今宮中学横の防空壕が 地響きを挙げて上下に揺れるのです。

1 t爆弾を惜しみなく投下して行くのです。

疎開地へ3月8日頃に帰って来て間もない3月14日未明に大阪大空襲に見舞われますが、朝方、先生から大阪が大空襲にて焼野原に成ったらしい、皆の家も学校も無くなった様だが、細かくは分からないとの事。1年生から3年生までの児童が疎開して来ており、話を聞いて泣き出す子もいて少々混乱していました。

5月初め頃、突然、両親が疎開地へ訪ねて来た。服を着たことが余り無かった父がよれよれの国民服に戦闘帽を被り、眼鏡の割れたレンズにテープを張った痩せ姿と汚れ切ったモンペ姿の母の姿を見ると大変な事だったのだと物も言えなかった。父は一言 ”もう家も店も焼かれて何もかも無くなって仕舞った” と言って涙を見せた。母は引き取っていた祖母を焼けてくる家の中から背負うって外へ出ようとする ”此処で死なせて” と言って居たのを 安全だと思われる木津辺りの防空壕へ入れて貰い 母は燃える家へ引き返したそうだが 後で祖母が亡くなった事を後で分かってどう仕様も無かったと悲しそうに教えて呉れた。



大空襲で住処を失った両親からの手紙から知人宅を転々としている事を知ったが 敗戦にて大阪へ帰って迎えて呉れた家は 周囲は何処も焼けた様子もない静かなアベノの住宅地だった。

元気を取り戻した父はバラック建てに近いかつてのジャンジャン町に印判店を構え、街並みが揃うと出来立ての町会の世話役に成っていた。併し無理を重ねて居たのか私が中学1年頃に安酒を飲み過ぎたか 体を壊し半年近く生死を彷徨うように寝込み、母が家の支度を済ませると新世界の店を開け、夜は私が店を閉めに行く生活が続いた。

生への執念か 気力か 入院もせず少しづつ体力を取り戻していった。父の仕事を慕っ

て焼け出された所からも お客が有り忙しく成り、私への手伝い仕事も増えて来て 当時から熱中していた学校での野球も隠れて行う様に成っていた。はんやは彫刻する他に外の仕事も結構多いのです。矢張り父は私をはんやの跡継ぎにさせる積りだなと嫌々乍ら感じて居ました。

中学を卒業し、高校進学を反対する父に対し 母は黙って願書を出す様に言って呉れました。所が練習に2~3日参加するだけでしたが、高津を前年優勝に導かれた監督がジャンジャン町の小さなはんやに来られて 高津の野球部に来る様にと熱心に父を説得して頂いた様で、” しゃない行け” 一言でした。私が帰って来るのを待ちかねたように帰って行かれる監督の背中に最敬礼をして居ました。

やっと父の執念から解放された気持ちに成って居ました。お蔭で3年間、常に甲子園を目指せる強力な野球部で夢が叶える寸前まで行けました。あれ程毛嫌いしていた野球を、父は試合有る度に球場の片隅にて応援してくれていました。

了